



魔法の文学館
(江戸川区角野栄子児童文学館)



江戸川区
英語教育プログラム

Edogawa English Program

理論編



江戸川区教育委員会

Edogawa English Programの発行に寄せて

教育長 内野 雅晶

江戸川区英語教育プログラム「実践編」と共にこの「理論編」を作成いたしました。

本プログラムは、外国語指導の理論的基盤を体系的に整理するとともに、教育実践と有機的に結び付けることを意図して編纂されたものです。理論は実践によって磨かれ、実践は理論によって支えられるものであり、本書がその両者を往還するための確かな指針になることを大いに期待しています。

また、教育現場においては、学習者一人一人の実態や背景を踏まえた柔軟で創意ある指導が求められます。本書が、日々の授業づくりや指導改善の一助となり、教職員の皆様が自信と展望をもって教育活動に取り組まれる契機になることを願っております。

教育とは、人と人との対話の中で深まり、広がっていくものです。本プログラムの活用により、児童・生徒一人一人が自らの可能性を引き出し、躊躇なく英語を話すことにつながることを願ってやみません。

結びに、本書の作成が本区教育のさらなる充実と発展に寄与することを祈念いたします。



令和8年3月31日

Edogawa English Program 理論編 について

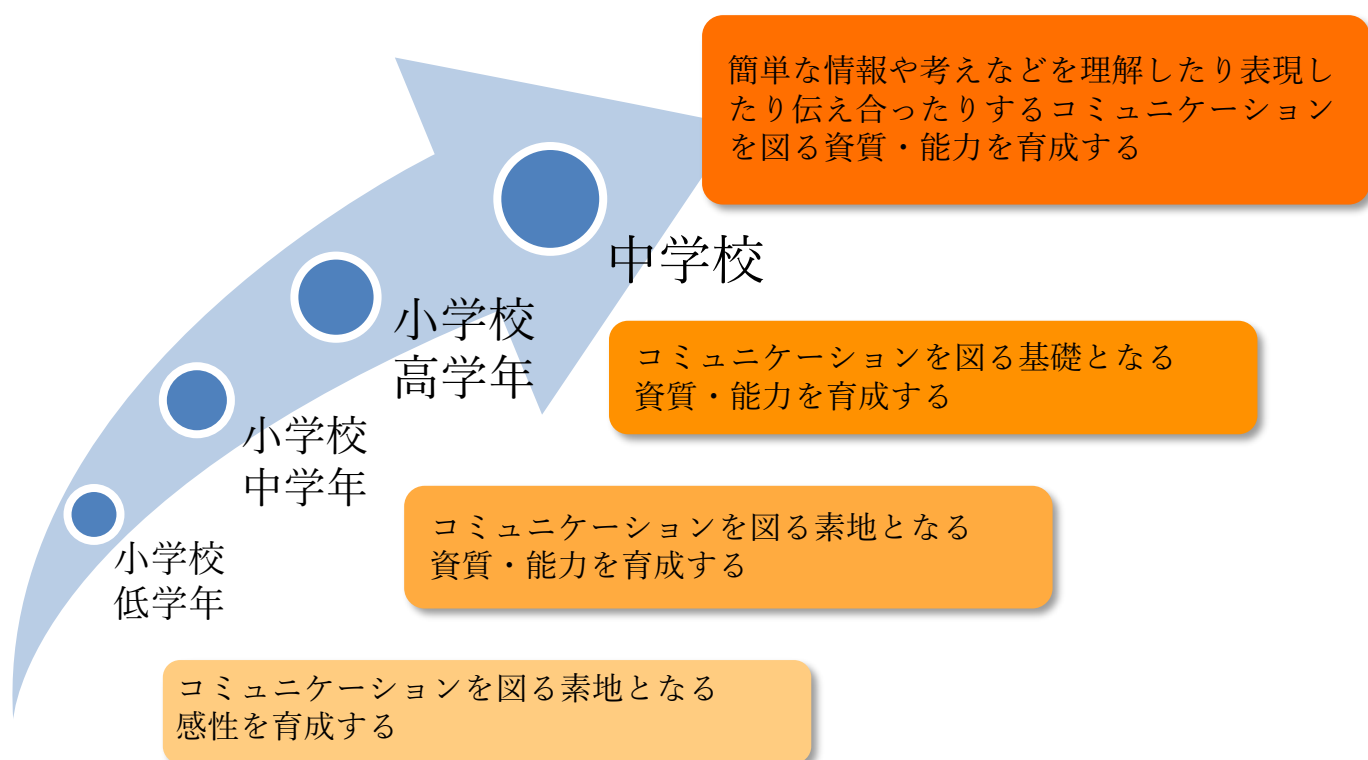
躊躇なく英語を話す児童・生徒の育成に向け、小学校第1学年から中学校第3学年までの9年間で系統的に児童・生徒の英語力を育てるためのプログラム「Edogawa English Program」を作成することになりました。

「Edogawa English Program 理論編」では、小学校第1学年から中学校第3学年までの9年間の目標や基本事項についてを掲載しています。

小学校低学年の外国語の学習については、学習指導要領上に位置付けられていないため、「Edogawa English Program」作成委員会において、小学校中学年からの目標との接続や発達段階を踏まえて検討し、小学校低学年の外国語の学習を「英語活動」として位置づけ、目標を整理しました。

「Edogawa English Program実践編」の根拠としてご活用ください。

「江戸川区 小中連携カリキュラム 目標系統図」



小学校低学年（第1・2学年）の英語活動の目標

	小学校第1学年及び第2学年 英語活動
知識及び技能	(1) 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等を感じるとともに、外国語の音声や表現に慣れ親しむようにする。
思考力、判断力、表現力等	(2) 身近で簡単な事柄について、外国語の会話や歌を聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う楽しさを感じられるようにする。
学びに向かう力、人間性等	(3) 外国語を楽しむ活動を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

小学校低学年（第1・2学年）の英語活動 領域別の目標

	小学校第1学年及び第2学年 英語活動
聞くこと	<p>ア ゆっくりはっきりと話された際に、自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取り、慣れ親しもうとする。</p> <p>イ ゆっくりはっきりと話された際に、身近で簡単な事柄に関する表現の大体の意味が分かるようにする。</p> <p>ウ 文字の読み方が発音されるのを聞き、文字に慣れ親しもうとする。</p>
話すこと [やり取り]	<p>ア 基本的な表現を用いて挨拶、感謝をしたり、それらに応じたりするようにする。</p> <p>イ 自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や表現を用いて伝え合おうとする。</p>
話すこと [発表]	<p>ア 身の回りの物について、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて真似したり話したりしようとする。</p> <p>イ 自分のことについて、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて真似したり話したりしようとする。</p> <p>ウ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、人前で実物などを見せながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて真似したり話したりしようとする。</p>

	小学校第3学年及び第4学年外国語活動	小学校第5学年及び第6学年外国語	中学校外国語
知識及び技能	(1) 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	(1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	(1) 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。
思考力、判断力、表現力等	(2) 身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。	(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。
学びに向かう力、人間性等	(3) 外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う	(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

5つの領域別の目標

	小学校第3学年及び第4学年外国語活動	小学校第5学年及び第6学年外国語	中学校外国語
聞くこと	ア ゆっくりはっきりと話された際に、自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取るようにする。 イ ゆっくりはっきりと話された際に、身近で簡単な事柄に関する基本的な表現の意味が分かるようにする。 ウ 文字の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかが分かるようにする。	ア ゆっくりはっきりと話されれば、自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるようにする。 イ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、具体的な情報を聞き取ることができるようにする。 ウ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えることができるようにする。	ア はっきりと話されれば、日常的な話題について、必要な情報を聞き取ることができるようにする。 イ はっきりと話されれば、日常的な話題について、話の概要を捉えることができるようにする。 ウ はっきりと話されれば、社会的な話題について、短い説明の要点を捉えることができるようにする。
読むこと		ア 活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができるようにする。	ア 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取ることができるようにする。

読むこと		イ 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする。	イ 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の概要を捉えることができるようにする。 ウ 社会的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の要点を捉えることができるようにする。
話すこと [やり取り]	ア 基本的な表現を用いて挨拶、感謝、簡単な指示をしたり、それらに応じたりするようにする。 イ 自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うようにする。 ウ サポートを受けて、自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて質問をしたり質問に答えたりするようにする。	ア 基本的な表現を用いて指示、依頼をしたり、それらに応じたりすることができるようにする。 イ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする。 ウ 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。	ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。 イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする。 ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようにする。
話すこと [発表]	ア 身の回りの物について、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。 イ 自分のことについて、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。 ウ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、人前で実物などを見せながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。	ア 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。 イ 自分のことについて、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。 ウ 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。	ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。 イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。 ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。
書くこと		ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。 イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。	ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて正確に書くことができるようにする。 イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようにする。 ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。

小・中学校9年間を見通して、
どの学年でも「躊躇なく英語を話す児童・生徒」を育てます。

英語活動・外国語活動・外国語 指導における基本事項

「小学校外国語活動・外国語研修ハンドブック」（文部科学省）より一部抜粋

1

他教科等と連携した指導の在り方

外国語は、自身の思いや考えを伝える手段である。外国語を使って、日本の文化や地域のこと、自分の考え等を相手意識をもって語らせたい。そのため、伝える内容が大切になる。他教科等の学習内容や活動を外国語の授業に取り入れる良さは以下の点である。

- 小学校の教科内容は児童の日常生活にかかわるものが多く、英語表現と関連させることが比較的容易である
- 指導者は教科内容を把握しているので、英語表現を取り込みやすい
- 教科に関連する内容であるため、児童は容易に次の授業でも思い出すことができる
- 児童の英語に対する興味を維持できる
- 上の学年に進んでも、各教科とも前学年の授業がベースになっているため、学習内容の継続性・関連性が高く、習得に効果的である

国語科、家庭科、図画工作科などの他教科等で得た知識や体験などを生かした活動を展開することで、児童の知的好奇心を更に刺激することにもなる。広く言語教育として、国語教育をはじめとした学校におけるすべての教育活動と積極的に結び付け、児童が進んでコミュニケーションを図りたいと思うような、興味・関心のある題材や活動に取り組むことが大切である。

2

歌・チャンツの活用

1 歌・チャンツの効果

歌やチャンツは、児童が音程やリズムに合わせて活動することができ、楽しみながら自然に英語の音声や表現に慣れ親しむことができるため、小学校の授業では多く取り入れられている。ここでは、その効果についてまとめる。

(1) 児童の興味・関心を高めることができる

- 児童は、言語の「学習」であるということを意識せず、楽しく活動に参加できる
- 歌を聞いたり歌ったり、リズムに合わせて発音する中で、児童を自然に英語の世界に導くことができる
- リズムに乗って声を出すため、声を出すことへの恥ずかしさを軽減する
- 全員で音楽に合わせて活動するため、学級全体に一体感が生み出せる

(2) 外国語の音声やリズムに慣れ親しむことができる

- 外国語独特のリズムやイントネーションを繰り返し聞くことで、自然に身に付けることができる
- 歌を歌う、動作を交えるなど、体全体で英語の音声やリズムに触れるため、記憶に残りやすい
- 簡単な歌は、繰り返しが多く、英語らしい発音を身に付けやすい
- チャンツは、単純な繰り返しの中で、単語を置き換えるなどして、表現を増やすことができる

教科としての授業では、今まで以上に学習内容の定着が求められ、歌やチャンツで慣れ親しんだ自然な英語の表現が、実際のコミュニケーションの場で生かされることが望まれる。多くの児童が楽しく活動に参加できる歌やチャンツのもつ魅力と、その効果をしっかり理解して、授業に適切に取り入れていくことが重要である。

3

絵本の活用

中学年の児童の多くは、外国語活動で初めて英語に触れることも多く、この段階では、理解可能な大量のインプットを与えることが重要である。同時に、この時期の児童にとって、絵本は身近な教材であり、「英語を聞いて分かった」という体験ができる良質な教材であるといえる。

1 絵本を活用することの効果


- 読み聞かせ活動では、児童が指導者の英語を聞き、絵の助けを借りて「英語を聞いて意味が分かる」体験をすることができる
- 良質なまとまりのある英語をインプットできる
- 絵本には同じ表現が繰り返し出てくるため、自然に語彙や表現を身に付けやすい

2 読み聞かせの留意点

- ジェスチャーを多用したり、絵本に載っている文言をそのまま読むのではなく、絵本の英語を児童に理解しやすく別の言葉で言い換えたりして、児童の理解を助ける
- 一方的に聞かせるのではなく、児童に絵本の絵やあらすじについて時折質問したり、「児童とやり取り（インタラクション）」「間を取る」などしながら、児童のつぶやきや繰り返しを引き出したり、児童を絵本の世界に引き込むようにする
- 一通り読み聞かせた後、注目させたい点を示し、もう一度読み聞かせをする

3 絵本を選ぶ際の留意点

- 指導する単元のねらいや題材、言語材料にふさわしいものを選ぶこと
- 児童の発達の段階に応じた多様な使い方のできるものが望ましい
(例) ストーリーが簡潔で分かり易く、同じ表現が繰り返し使われているものや、児童が日本語で読んだことのあるもの など
- 英語の絵本の中には、英語圏の児童に向けてかかれたもの、日本の児童に向けてかかれたものなどがあり、それぞれに特徴があることを理解すること
- 学級全体に見えるように、大型絵本を使うなど、教室の大きさ、児童の人数等に合わせて、絵本の提示の仕方を考えること



• 絵本は、児童に良質なインプットを与えるために効果的な教材であり、授業で積極的に扱うとよい。

• 児童を絵本の世界に入り込ませ、自然に英語に触れるようにするために、読み聞かせの技術を高める必要がある。

• 絵本の選定に当たっては、題材や扱う言語材料等との関連を考えるとともに、教室環境に合わせて、本の大きさや提示の仕方等を考えることが大切である。

4

チーム・ティーチングの進め方

1 チーム・ティーチングの形態については、学級担任または英語科教員とALTとのチーム・ティーチングについて述べる。

チーム・ティーチングの意義

チーム・ティーチングとは、文字通り、複数の指導者がチームを組んで児童の指導に当たるということである。したがって、チーム・ティーチングの意義は、「複数の指導者がいるからこそ可能なことは何か」、「指導者それぞれの適性や個性を生かした授業とはどのようなものか」を考えることと同義である。

まず、複数の指導者がいることの利点については、「教室内の児童を一人の目ではなく二人の目で見守り、指導する」ことが挙げられるだろう。学級担任や専科教員（以下、「学級担任等」とする）が、単独では気付かない面にALTが目を向けて補助をしたり、全体指導の傍らで個別に支援を必要とする児童に対して声かけをしたりするなど、物理的に複数名の指導者がいるというメリットを生かした役割分担ができるとよい。

また、ダイアログ形式の活動モデルを示す時に、学級担任等の単独授業では、学級担任等が一人二役をするか、児童一人を前に出して示すことが多くなるが、ALTがいることにより、スムーズに対話モデルを見せることが可能となる。児童にとっては、分かりやすいモデルを見ることができると、その後のコミュニケーション活動で何をすればよいか、どう言えばよいのかを簡単に理解し、スムーズに活動に入ることができる。この点もチーム・ティーチングの果たす大きな意義であると言える。

学級担任 英語科教員	<ul style="list-style-type: none">児童・生徒一人一人をよく理解しているため、学習指導や生活指導の両面に配慮し、学級の児童・生徒の実態に応じた内容を設定できる児童・生徒と信頼関係が構築されており、児童・生徒が英語活動や外国語活動、外国語科の授業を担当することに安心感を覚え、リラックスして授業に臨むことができる小学校では、全教科等を担当しているため、他教科等での学びを英語活動や外国語活動、外国語の学習に取り入れることができる英語学習者の一人として、児童・生徒と共に英語を使い学ぶ存在である
ALT	<ul style="list-style-type: none">ネイティブスピーカーの発音を聞かせたり、母国の生活や文化等の情報を伝えたりすることができる児童・生徒にとって、学んだ英語を実際に使えるコミュニケーションの相手である

2 ティーム・ティーチングの進め方と学級担任等と ALT の役割分担について

先述の特性を踏まえ、ティーム・ティーチングに当たっては、次のように役割分担をし、授業を計画し進めるとよい。

(1) 授業準備・授業前

学級担任・英語科 教員に求められる 役割	<ul style="list-style-type: none"> 児童・生徒の実状、興味・関心と単元の題材に合ったコミュニケーション活動の設定をする 役割分担を示し、メインの活動と学習の流れについて打ち合わせをする
ALTに求められる 役割	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション活動に必要な単語や表現を準備する 単元に関連して提示できる自国の文化等を紹介する素材を準備する

(2) 授業中

学級担任・英語科 教員に求められる 役割	<ul style="list-style-type: none"> 児童・生徒の理解の様子をよく観察しながら授業を進める ALTとともに活動の仕方を示す 小学校の指導者は、児童の日本語によるつぶやきや気付きを拾い、ALTに易しい英語で伝える ALTの発音を聞かせて児童・生徒に聞かせたり、スピードを変えさせたりし、児童・生徒に英語を聞かせる 評価について分担して行い、振り返りの活動では、児童・生徒の活動の様子について気付いたことをほめる
----------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(3) 授業後

学級担任・英語科 教員に求められる 役割	<ul style="list-style-type: none"> ともに、指導についての評価を行い、改善方法について話し合う。 児童・生徒の学習状況について、気付いたことや発見したことを共有する
ALTに求められる 役割	

中学校外国語指導における基本事項

「中学校英語科教師のための指導資料」（東京都教育委員会）より一部抜粋

リスニングの指導について

具体的で明確な目的に基づいた学習活動を設定する。

リスニングの指導では、内容を確認しながら情報を正確に聞き取り、適切に応じられる力を付けていくことが必要です。リスニングの指導において、生徒の聞く力を効果的に伸ばしていくためには、ただ聞くだけの活動にならないよう、何のために聞くのか目的を明確にした学習活動を設定することが重要となります。

まず、教材や活動に即して、強勢、イントネーション、区切りなど英語の音声の特徴を把握させる、内容を理解させる、既習事項を確認させる、新たに学ぶ内容に興味・関心をもたせるなど、何のために聞くのかを明確にします。さらに、あらすじなどの概要を聞き取るのか、時間や場所など特定の情報を聞き取るのかを明らかにします。その上で、目的を達成するために、生徒の実態等を十分考慮し、学習活動を工夫して設定することが大切です。内容が生徒の興味・関心や学力等の実態とかけ離れていたり、方法が画一的であったりすることのないようにします。

リスニング指導のポイント

○ タスクを与える。

内容把握を目的とする場合などでは、あらかじめ、Question（質問）などタスクを用意し、与えたタスクを解決するために必要な情報に注意して聞くよう指導します。このようにして、生徒が、具体的な目的意識をもって、主体的に聞くことができるようにし、聞き取った英語の様々な内容の中から、必要な情報を選び出したり、関連させて考えたりできるようにします。

○ 最後に文字で確認する。

リスニング教材などでは、答えが合っている、間違っているだけでなく、聞いた英語を最後に文字で確認するようにします。

○ 生徒の興味・関心を引き出し、意欲を高める。

生徒が「聞きたい」「聞いていて楽しい」と思えるような、英語の歌や著名人のスピーチ、映画のワンシーンを活用したり、「これができるようになった」と、自分がステップアップしているのが実感できるようにしたりして、生徒の興味・関心を引き出し、意欲を高める指導の工夫を行うことが重要です。絵や写真、実物を提示しながらリスニングの活動を行うのも効果的です。登場人物の絵や場面の写真、実物を取り出して生徒に見せながらやり取りする方法や、絵や写真の一部を別の紙で隠し、何（誰）が隠れているのか生徒の想像を膨らませて聞かせる方法などがあります。

○分からなくても聞いてみる。

A L Tの話を書く、英語の歌を書くなど、ネイティブスピーカーが自然に話したり、歌ったりしている内容を、分からなくてもジェスチャーや表情から内容を予測したり、リズムやメロディを楽しみながら聞いて、英語に親しむ活動を取り入れてみることもいいでしょう。

○最初から100%を求めない。

日本語であっても、文の中に分からない語彙が含まれている時がありますが、その際、私たちは文脈や前後の語から意味を予測しながら全体を理解しています。英語のリスニングでも、習熟の程度に応じて60%程度が理解できればよし、80%程度が理解できれば目標を高く達成できたと考え、全てを聞き取ることより類推により理解することができるよう指導していきます。

オーラル・イントロダクションについて

オーラル・イントロダクションは、教師が生徒にとって既習の英語の語彙・表現を用いながら、口頭で分かりやすく、未習の題材や言語材料を示すことで学習活動の導入を行う指導方法です。オーラル・イントロダクションは、「聞くこと」に加えて「話すこと」についても指導できる点や既習事項を反復学習できる点、また、生徒が英語を積極的に使おうとする学習意欲を高める点でも効果的です。

オーラル・イントロダクションでは、教師が一方向的に説明するのではなく、教科書等の絵や写真を利用し、生徒に英語で簡単な質問をして、生徒に考えさせ、答えを引き出しながら段階的に理解させていくことが重要です。生徒と教師とのインタラクション（相互交流）により、教師は生徒の理解度を確認することができ、必要に応じて、その場で説明や練習を補うこともできます。

一方、日本語による補足的な説明については、十分な配慮が必要です。オーラル・イントロダクションの後に、繰り返し日本語での説明があるとすれば、生徒は、英語による説明を真剣に受け止めようとはしなくなります。

(1) オーラル・イントロダクションの目的

- 本文を理解するための動機付けを行う。
- 本文を理解するために必要な語彙や文法を導入する。
- 本文を理解するための背景知識を与える。
- 本文の内容の概要を理解させる。

(2) オーラル・イントロダクションを行う際のポイント

- 新出事項、既習事項（文法、語彙、表現）を把握する。
- 生徒が理解しやすい表現を用いた発問、類推しやすい発問の順番を考慮しておく。
- 視覚的補助（板書、絵・写真など）の効果的な活用を考えると同時に、板書計画を立てておく。
- 既習事項や教師とのやり取りから得た情報や、教師の提示した絵や写真の情報を活用することで生徒が類推できるようにして、学習内容への関心を高められるようにする。
- 生徒が音声に集中できるよう、文字の使用はなるべく避ける。
- 新出事項を含め、重要な表現は繰り返して復唱させる。
- あくまでもイントロダクション（導入）なので、オーラル・イントロダクションでは生徒に100%の理解を求めない。その後に行う説明との補完的な関係で、生徒は教材をより深く正確に理解できる。
- 習熟の程度の遅い生徒は、文ではなく単語で答えることがあるが、次ページの例のように、教師が生徒の言いたいことを受け止め、文にするとともに、繰り返すことによって定着を図る。
- 概要を把握させる目的で比較的長い英文を読ませる場合には内容については触れず、概要を把握させるために必要な最低限の語彙の意味や背景知識、読むための動機付けなどに絞って行うとよい。

スピーキングの指導について

話す活動については、「英語の音声の特徴をとらえて正しく発音すること」、「自分の考えや事実などを正しく伝えること」、「聞いたり読んだりしたことなどについて問答したり意見を述べ合ったりなどすること」、「つなぎ言葉を用いるなどの工夫をして話を続けること」、「与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」が、学習内容となっています。

したがって、ただ英語で話をさせればよいということではなく、どのようなねらいで、どのように活動を工夫するかが重要となります。

話す活動には大きく分けて、「原稿を基に話す活動」と「即興性をもって話す活動」があります。

ここで注意しなければならないのは、「原稿を基に話す活動」において「原稿の作成」、「暗記」、「発表」というプロセスを繰り返しているだけでは、暗記したことを単に再生するだけの域を出ない点です。テーマに沿ってスピーチ原稿を書かせて、発表させる活動では、教科書等の既習の英文を活用して、自分の伝えたい内容を調べながら表現することに慣れていき、最終的には、瞬時に考えて話すといった、「即興性をもって話す活動」ができることを目指していくことが重要となります（Ⅱ実践編を参照）。

「原稿を基に話す活動」は、生徒の最終発表を、1時間又は2時間の授業の中で集中して行うのか、それとも、数名ずつに分けて帯活動として発表させるのか、発表形態を考えた上で指導計画を作成します。その際の注意点は以下のとおりです。

原稿作成について

- 学校行事や夏休みの出来事、校外学習の思い出等、生徒の興味・関心等の実態に基づいたテーマ設定により、話し手はスピーチ原稿を考えやすく、聞き手は興味をもって聞くようになります。また、教師やALT、先輩によるモデル・スピーチを原稿で読ませる、ビデオを見せるなど、具体例を示すことで、スピーチのイメージをもたせることが大切です。
- 原稿を作成する際には、生徒が様々な単語やフレーズを入れ替えて使えるようパッケージで示すとよいでしょう。例えば、「将来の夢」について書くのであれば、様々な職業に関する語彙が必要となるでしょう。教科書の巻末等に単語リストとして食べ物、スポーツ、教科などとともにもとめてある場合もあるので、積極的に活用するとよいでしょう。
- 生徒が原稿を書く活動に取り組んでいる間、教師が机間指導しながら、文を書くためのヒントを与えます。書かせた後で集めて添削をすると、生徒の書きたい内容が英語だけでは分からない場合があります。また、共通で見られる誤り等については、クラス全体で確認します。「3文程度書いたら見せる」など、「全てを書いていなくても教師に見せてよい」と伝えておくと、習熟の程度が遅い生徒も取り組めるようになります。

リーディングの指導について

和訳を極力避ける

リーディングとは一文一文を日本語に訳すことではありません。学習指導要領では、英語を読んで表面的に理解するだけでなく、書き手の意向などを理解できることを重視しています。

★第1学年

第1学年の教科書には抽象的な語はあまり出てこないため、多くをジェスチャーで表すことができます。すなわち、日本語を介さず英語をジェスチャーと直接結び付けることができるということです。日本語訳は必要ありません。オーラル・イントロダクション、新出単語の導入を終えたら、本文を1文ずつジェスチャーで表現させてみましょう。ジェスチャーができていない生徒は内容理解ができていないと言えます。内容がよく分からない生徒は友達のジェスチャーを見ればだいたいの内容が分かります。「だいたい分かればいい」という気持ちをもたせていくことが大切です。このように言葉をジェスチャーにして内容理解の確認をし、ジェスチャーを言葉にしてアウトプット（本文の再生）をさせれば、「一文一文を日本語に訳すこと」や「日本語と外国語のチャンネルを切り替えること」がなく、効率のよい外国語学習が可能になります。内容が少し込み入った部分については「登場人物はどのような気持ちで言っているの?」、「登場人物はどのような動作をしながら言っているの?」などの生徒の理解を促すような教師の発問で補います。

★第2学年

語と語のつながりを意識して読み取らせるように指導します。また、教科書本文は接続詞が入り長くなることがあります。そこで、意味のまとまりを意識して読み取らせます。第2学年前半は、ジェスチャーやピクチャーカード、写真等での読解が有効ですが、後半になってくると抽象的な語が多くなってきます。そのような場合には教師が部分訳を与える程度にしましょう。生徒の和訳は不要ですし、教師の全訳も不要です。第1学年の頃と同様に発問によって生徒の内容理解を助けるようにします。

★第3学年

skimming（大意を把握すること）と scanning（特定の情報を求めて素早く読むこと）も早い時期から始めるとよいでしょう。入試などの長文問題に取り組めるようにするためには、読む分量を増やすことやスピード読解のスピードを上げていくことを目指した指導が重要です。パラグラフという概念を理解した上で、概要や要点をとらえさせる指導を進めていくことが大切です。また、読解のスピードを上げるためには、教科書の読解を扱ったセクションなどを使って速読の練習を行うとよいでしょう。WPM（words per minute：1分間に何語読めたか）を測る活動を取り入れて生徒の学習への意欲を持続させる取組も効果的な指導の一つです。計算式は以下のようになります。

$$\text{WPM} = \text{語数} \times 60 / \text{読むのにかった秒数}$$

目安となる目標は、2学期末で、習熟の程度の遅い生徒で150語から200語、中程度の生徒では200語から300語、早い生徒では300語以上です。

○教師の音読取り入れながら大意を把握させる

教科書以外の短い読み物の読解を継続的に行うとよいでしょう。第2学年では50～70語、第3学年では80～100語程度の短い文章を使うとよいでしょう。既習の文法事項だけで書かれている素材がベストですが、未習の文法事項がある場合にはその下に意味を書いておきましょう。語彙については未習語があっても当然です。内容理解のためにどうしても必要な未習語については作成するワークシートの下余白に意味を書いておきます。それ以外の語彙については、意味は書きません。

《活動例》

- 教師は内容理解のための質問を一つ作る。
- 質問は全部を読ませるために、なるべく文章全体の終わりの部分から出題する。
- 生徒は時計の秒針を見て、読み終わった秒数を記録する。
- 生徒は質問の答えの部分に下線を引く。
- 1分経過したら、教師は口頭で質問を伝える。生徒に答えさせ、次に教師が本文を音読する。
(聞くと分かる場合もあるからである。内容理解に必要な最低限の説明を加える。)
- 最後に生徒はWPM (words per minute) を算出し、記録用紙に記録する。

$$\text{WPM} = \text{語数} \times 60 / \text{読むのにかった秒数}$$

継続することによってWPMの数値が上がり、励みになる。教科書の読解を扱ったセクションを扱う際にも同様に行うことができる。

英語によるコミュニケーション能力の基礎を培う点で、音読は極めて重要です。

中学校の生徒が英語を身に付けていくために、まずはインプットとして、「聞く」ことが重要となります。音読は、読むことを練習しているだけの活動ではなく、自分で発した音声を自分で聞くことができ、インプットの量を充実させることができます。週4時間の授業時間の中だけでは、インプットの量が十分とはいえない現状があるので、ここでは、基礎を形成する第1学年、第2学年の家庭学習に円滑につなげることができる指導例を示します。

★第1学年（例）

- アルファベットを見てその表す音を発音できるようにする。
- 教科書本文を数多く音読するように指導する。

アルファベットを見てその表す音を発音できるというのは、例えば a を見たら [ei] 又は [a]、b を見たら [b] と発音できるということです。

次に単語単位、最後に句や文単位で文字言語を音声言語に置き換えることができるようになることを目指します。

英語の音声十分に分かっていないと、生徒にとっては暗号解読のようになり、全く面白くありません。したがって、第1学年の時期は音声重視の授業を心がけたいものです。単語が読めない、文が読めない原因は不十分な音声指導に起因することが多いものです。音声指導を行う際は、単に「暗記しなさい」という指導では、生徒は発音やイントネーションを無視し、覚えることだけに意識を集中させてしまうので、生徒の状況を観察しながら指導していくことが大切です。正確な音声を身に付けることができたなら、本文を自然に覚えるようになるまで教科書本文を繰り返し音読することを指導していきます。

★第2学年（例）

- スピードに慣らす。
- コロケーション（連語）の指導を行う。
- 意味のまとまりを意識させる。
- 教科書以外の文にも触れさせる。

教師の後に続いて読む repeating だけでなく、parallel reading (overlapping, paced reading) や shadowing を行うことによりスピードに慣れるようにします (P20-21 参照)。

教科書本文では、接続詞が入、一つの文が長くなるので、言葉をまとまりで聞かせるとともに、意味のまとまりを意識して読み取らせます。

ライティングの指導について

冠詞や名詞の単数形、複数形の使い分けは、日本人にとってとても難しいと言われており、書きながら迷うことがよくあります。このことから書く能力は「聞く」、「話す」、「読む」「書く」の4技能の中で、高度な技能であるといえるでしょう。したがって、生徒はミスをして当たり前という気持ちで、間違いを恐れずに書かせる指導を行っていくことが大切です。

○ 話せたことが書けるようにさせる

生徒が、口頭練習を十分にしておいて、英文を言えるようになってから書く練習をするなど、「話せる」ことを「書ける」ようにすることが大切です。教師が机間指導をしながら生徒の観察に努め、口頭練習の中で間違いがあった場合は、間違いの修正について指導しながら練習を繰り返し、生徒が正しく言えるようになったところで最後に書く活動を行います。

○ 間違いを恐れず書かせる

正しく書けることは大切ですが、ミスなく正しい英語で書くことができることばかり気にすると、生徒は失敗を恐れ、話すこともしなくなります。「間違いを恐れずに話す」能力を育てるには、「間違いを恐れずに書かせる」指導が大切です。

○ 3年間をかけて繰り返し指導し、自分の考えを正確に書けるようにさせる

冠詞や名詞の単数形、複数形などについては、3年間をかけて繰り返し指導する必要があります。一つのライティングの活動が終わったら、そのフィードバックを必ず行い、多かった共通のミスについては、全体指導の中で重点的に取り上げることが大切です。

また、学習した文法事項等を使って自分の考えを書けるようにさせる指導を行う必要があります。例えば、現在完了を学習した後は、「自分の続けていることや経験について書いてみよう」など、自己表現を通してその文法事項の定着を図ることができるよう指導します。教師は、「このライティングの学習は何をポイントとしているのか」を生徒に理解させて活動に取り組みさせることが大切です。

○ まとまった文を書かせる時には構成を意識させる

英語では、最も伝えたい内容や伝えるものの概要といった文全体の核となる部分を先に、様々な情報は後になるよう構成することが一般的です。「結論を先に伝える」という視点を意識させて書かせるようにします。

ライティングの活動とは自己表現活動です。学習した知識を用いて、どのように自分の言いたいことを表現できるかということです。そのために、基本的な技能を段階的に確実に身に付けさせていくことが大切です。

中学校3年間を終えたときに、どのような力を生徒に付けさせなければならないかというゴールを常に念頭に置き、そのために各学年、各学期で何をしなければならないかを明確にして指導することが大切です。

例えば、第1学年の入門期には、まずアルファベットを正しく書けるように指導する必要があります。次は、板書や教科書などの英文を見ながら正確に写せる力、そしてそれに慣れてきたら、今度は正確に速く書ける力が求められます。このように第1学年の1学期の活動においても、段階を経て指導することが大切です。さらに、第2学年、第3学年になると、文脈のあるまとまった内容を伝えるなどの自己表現活動としての側面がより強くなるため、各段階に応じた指導の充実が一層求められます。

○ 生徒が書くことに慣れた時期に、正確に書かせる活動を行う

第1学年で、例えば、「アルファベットについて、制限時間を設けて順番に正確に書くことができるか」という活動に取り組みさせます。また、「教科書の英文を見ながら、4線の用紙に正確に写せるか」といった活動もあります。この場合は、生徒がある程度英文を書くことに慣れた2学期以降に行う方がいいでしょう。

○ 「ライティング・ノート」を用意し、意味が分かり話せるようになった英文を書く活動を行う

授業用のノートとは別にノートを1冊用意し、意味が分かり話せるようになった英文を書くようにします。教科書の英文、ペア活動中に話した英文に加え、自分が他のテキスト等で練習した意味の分かる英文についても自由に書いてよいこととします。生徒には、書いた文の数をカウントさせながら「いつまでに何文書けるようにする」というような目標を設定させて取り組ませると効果的です。

○ 音読筆写を取り入れる

ノートに英文を書く際に、黙って書くのではなく声に出しながら書く練習をします。英文を見て、音読し、自分の音声を聞きながら書くことで、4技能である「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」を統合的に活用しながらトレーニングができます。

○ 教科書や辞書を活用したライティングを行う

第2、3学年の目標としては、テーマやトピックを与え、文脈のあるまとまった内容を英作文させたいものです。そのときにモデルとなるのが教科書です。よい英作文を書かせるためには、よいインプットをたくさん与えることが大切です。普段から教科書をモデルにして、暗唱や「ライティング・ノート」に取り組んでいれば、自分が書きたいことを表現するための英文がすぐに思い浮かび、書くことができます。教科書はモデル文の宝庫です。日頃から教科書の英文を使って、自分の表現に置き換えて書く練習をたくさんさせます。

ここでは、文脈のあるまとまった内容を書かせる際の工夫として、考えられる例を紹介します。

○量を書かせるための工夫として、モデルを与える

例えば第3学年で、教科書に関連したトピックについて自分の意見を書かせる課題を与えたとして、

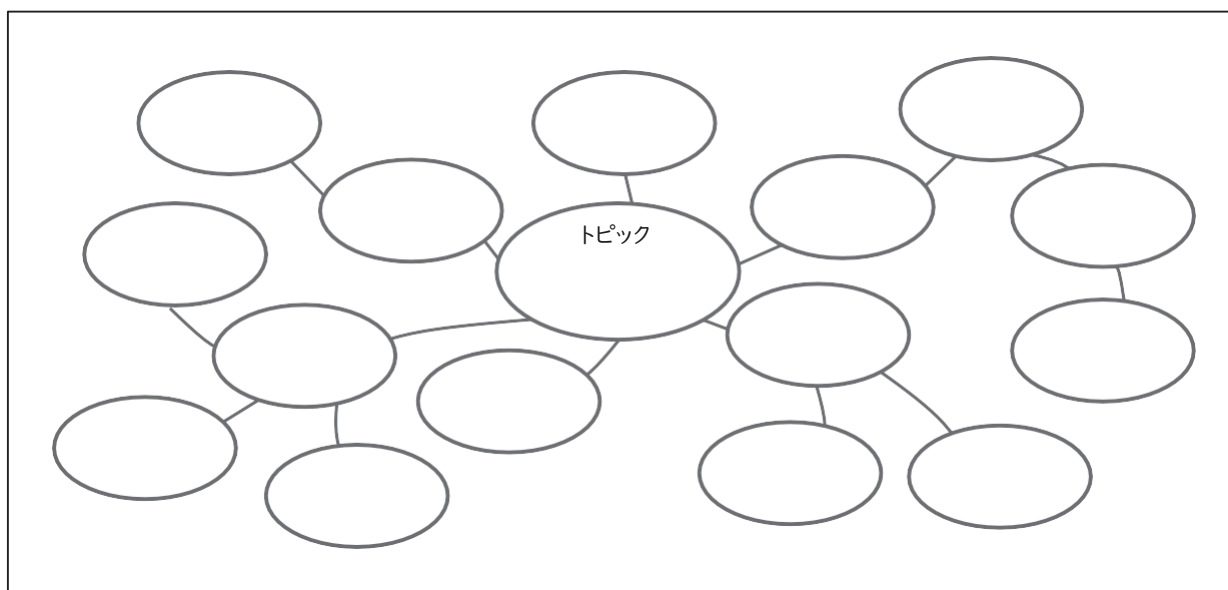
生徒にとって、トピックだけ与えられても、まとまった量の英文を書くことは難しいものです。また第3学年になると、自己紹介や自身の経験のような具体的な内容から、ある事柄についての自分の意見など、より抽象的な内容が求められていきます。そのような内容について、日本語で考えたことを英語に訳そうとすると、どうしても不自然な英文が出来上がってしまいます。しかし、「英語で考えて書くように」と言われても、何を書いているのかなか頭で浮かんでこないものです。

そこで、モデル文を活用することが効果的な指導の一例です。学年が上がるにつれて、モデル文は一層重要になります。モデルとしては、生徒同士で互いに書いたものを読み合ったり（順番に回覧して、感想を一言付箋で貼っていくと、自分の作品を見て励みになる）、先輩の書いたものをコピーして取っておき、それを紹介したりするとよいでしょう。教師が、その時期に身に付けさせたい表現を使ったモデル文を作成して紹介してもよいでしょう。モデル文を見ることで、習熟の程度の遅い生徒にとっても、「こうすればよいのだ」と具体的なイメージを理解することができ、主体的に取り組むことができます。

○「マインド・マップ」を活用する

「マインド・マップ」とは、トピックを中心にして、そこから思い浮ぶことをなるべくたくさん書き出し、さらにその思い付いたことをきっかけにして連想したことを広げて書いていくという手法です。原稿を書く際に、生徒が何かにこだわっていたり、なかなか考えが広がらなかつたりしたときに、「マインド・マップ」を作成させ、発想を広げ、その中から必要なものを選択して書けるようにします。

（「マインド・マップ」の例）



○ よいところに着目して観点別に評価する

つづりの間違いや文法ミスを見つけては、減点を重ねるばかりの評価では、生徒の意欲が下がってしまいます。「書いても点数にならない」、「どうせ減点ばかりだ」と生徒に思わせては、「間違いを恐れずにコミュニケーションを図る態度」を育成することはできません。そのため、ライティングに限らず、外国語の表現の能力においては、評価の視点として「正確な発話、正確な筆記」と「適切な発話、適切な筆記」の二つがあることに留意して評価するようにします。

「正確な発話、正確な筆記」は、強勢、イントネーション、文法などの言語についての知識を活用して、英語で正しく表現することができるかどうかを評価するものです。「適切な発話、適切な筆記」は、実際のコミュニケーションで誤解なく伝えるために、場面や状況に応じてふさわしい表現を選択したり、適切な声量や明瞭さで話したり、内容的にまとまりのある文章を書いたりすることができるかどうかなどを評価するものです。

生徒は試行錯誤を繰り返しながら、時間をかけて学習内容を身に付けていきます。例えば、第1学年で can + 動詞の原形がすぐにできなくても、第3学年で全員が can + 動詞の原形を用いた間違いのない文を書けるよう、繰り返し粘り強く指導することが大切です。

作成

Edogawa English Program 作成委員会

小岩第四中学校	校長	鈴木 訓文
松江第一中学校	校長	瀬戸 完一
鹿骨東小学校	校長	中田 伸代
瑞江第三中学校	副校長	望月 光代
松江第四中学校	主幹教諭	伊東 卓思
篠崎第三小学校	主幹教諭	煙山 有美
西小岩小学校	指導教諭	中村 啓子
小松川中学校	主任教諭	上野 翠湖
平井西小学校	主任教諭	芳賀 晶子

事務局

江戸川区教育委員会事務局

教育指導課

学力向上プロジェクト推進局長 倉田 克彦

指導主事 木山 朋江

学校教育支援センター

教科アドバイザー 佐藤 みち子

作成協力



発行日 令和8年3月31日



ともに、生きる。
江戸川区



江戸川区英語教育プログラム
Edogawa English Program